ジャック・ロンドン作 「リゴウンの死」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18128

明治大学教養論集　通巻五一四号（二〇一六・三）一―一四頁

ジャック・ロンドン作「リゴウンの死」

大矢　健　訳

血には血を、位には位を――スリンケットの掟より

「さて、それでは、リゴウンの最期のときの話を聞いてもらこととしようか」

語り部の声はここで途切れる。というより、彼は話を中断した。それから、分かっているなと言いたげに目くばせしてきた。私は、我々の目の位置と焚き火のあいだに酒瓶を掲げ、親指で残っている酒の量を示す。酒瓶を差し出すしかない。だって、この語り部は飲み助のパリトラムなのだから。彼からはこれまでもたくさんの話を聞かせてもらってきたし、とりわけリゴウンの最期の顛末を、この台本なき台本書きが語ってくれるのをずっと待っていたのだから。生ある者のなかでリゴウンのことをいちばん良く知っているのは、パリトラムなのだ。

彼が頭を後ろに倒すと、ウーというなり声がゴクリと酒を飲みくだす喉仏の音へと変わった。すると、酒瓶の下にきた彼の上半身が巨大な影となって、私たちの背後にあった不機嫌そうな崖のところで揺れて踊った。巨大で上下逆さまになった酒瓶の影である。パリトラムは愛おしそうに舐めたあと、酒瓶から口を離す。それから残念そうに神秘的な

天空へと目をやった。そこでは夏のオーロラのくすんだ白い光が舞っていた。

「不思議なものじゃのう」と彼は言う。「水のように冷たく、火のように熱い。酒は酒飲みに力をあたえ、同時に力を奪う。老人を若返らせ、若者を年寄りにする。疲れた者を立ち上がらせては前に進ませる。疲れを知らぬ者には、重荷をあたえて眠りにつかせるのだ。俺の弟はウサギのように小さな心臓をしていた。ところが酒を飲むと、すぐさま敵を四人もやっつけた。俺の父は偉大なる狼のような男だった。誰にだって牙を剥いた。が、酒を飲んだら背中を銃で撃たれてしまった。慌てて逃げ出したからだ。酒というのは、ほんとうに不思議なものじゃのう」

「これは〈スリー・スター〉っていう名の酒だ。向こうで奴らが飲んで腹をこわしてるのよりずっと上等な酒だ」と、ぽっかりと口を開けた漆黒の谷間を覆うように手を回して、指さしながら私は答える。下のほうでは浜辺で火が焚かれていた。ほんの小さな光だったが、そのせいで、夜に陰影と実在感が生まれていた。

パリトラムはため息をついて、首を横に振る。「だから俺はここに、お前のところに来てるのじゃないか」

彼の眼差しが酒瓶と私を抱きしめた。恥ずかしげもなく口にされた酒への渇望より、その眼差しのほうがよほど雄弁だった。

「駄目だよ」と私。酒瓶を膝のあいだにしまい込む。「リゴウンの話でしょう。〈スリー・スター〉の話はあとでいい」

「酒はまだいっぱい残っているじゃないか。それにまだ俺は疲れてもおらんぞ」と、パリトラムは大胆におねだりしてきた。「そいつが唇に触れると、リゴウンの話、彼の最期の話が俺の口から調子よく出てくるんだ」

「酒は酒飲みから力を奪う」と、私はパリトラムの口調を真似た。「疲れを知らぬ者には重荷をあたえ、眠りにつかせる」

「頭のいい奴だな」と、プライドなどないかのように、腹を立てることもなくパリトラムは答える。「お前の兄弟たちと同じく、お前は頭のいい奴だ。寝ても起きても〈スリー・スター〉はお前らとともにあるというのに、飲み過ぎると

いうことがない。我らの山々にひそむ黄金、そして我らの海に住まう魚たちを、お前らは集める。ところがパリトラムやパリトラムの兄弟たちはといえば、貴様らのために金を掘り、魚を実際に採ってやる。貴様らは頭をつかって、〈スリー・スター〉が我らの唇を濡らすのをよしとする。酒を楽しませてもらうことに、我らは喜ぶ」

「私はリゴウンの話が聞きたかったのだけどね」と、いらいらして私は言った。「夜は短くなっている。明日はまたつらい旅だ」

私はあくびをして、立ち上がるふりをした。するとパリトラムはすぐ不安な様子となり、唐突に話を始めるのだった。

「齢を重ねたころのリゴウン酋長の願いは、部族同士が争わぬことだった。若きころには酋長も一流の戦士だった。島々と峠道に住まう戦争好きの酋長のなかの酋長、王のなかの王といえばリゴウンのことだった。リゴウン酋長だって、かつては来る日も来る日も戦に明け暮れていたもんさ。骨の棒、鉄砲玉、剣、これらが作った傷跡を酋長は自慢したものだ。誰よりも多くの傷跡を持ってると言ってね。酋長には三人の妻がいた。それぞれの妻には二人ずつの息子がいた。そんな息子たちも、最年長のものから最年少の者まで、全員、リゴウンの傍らで戦死した。巨大熊のように落ち着きのない彼は、どこへでも旅に出た。北はウナラスカ湾やシャロー海まで、南はクイーン・シャーロッツ湾まで。いやいや、噂では、ケイク族と一緒にピュージェット湾まで行き、守りをかためた家の中であんたら白人をやっつけたらしい[訳注1]。

「ところがだ、言ったとおり、齢を重ねたころ、リゴウンは部族間の平和を願った。恐怖を知ってしまったとか、焚き火のそばや喰い物でいっぱいの鍋が好きになりすぎたなんてことはない。っていうのも、彼は依然、最強の者として流血を求め巧みに敵を倒し、飢饉のときにはもっとも幼き者とともに空腹に耐えた。屈強な連中と一緒に荒れ狂う海や茨の道に挑戦してもいた。だが、白き顔[訳注2]のボストン・マンよ、多くの功績とそれへの罰として、リゴウンは戦船でお

前たちの国まで連れていかれてしまった。酋長が帰ってきたのはずっと後のことだ。そのとき俺はもう子どもではなくなっていたが、成熟した成人というのでもなかった。それで、歳とってもう子どもがいなくなっていたリゴウンは、俺をかわいがってくれた。知恵をたくわえた彼は、それを俺に分けあたえようとしてくれてたんだ。

『パリトラムよ、戦うのは悪いことではない』とリゴウンは言った。違うな、白き人よ、当時、俺の名はパリトラムではなく、いつでも空腹なる者オロと呼ばれていたんだ。飲み助になるのは、もっとあとのことだ。『戦うのは悪いことではない』とリゴウンは言った。『だが、同時に愚かなことでもある。この目で見たのだ。ボストン・マンたちの国では、男たちは互いに争ったりせん。でも、あいつらは強き者だ。それゆえ、あの強さをつかって、彼らは我々、島々と峠道に住まう我々を攻めてくる。奴らの前では、我々は野営地の煙、海の霧だ。だから、戦うのは悪くはないが同時に愚かなことであると、わしは言うのだ』

「これが理由となって、戦いとなればいつでも先頭に立っていたリゴウンが、それまでないほど強く部族に和平を求めた。で、老齢となり、酋長のなかの酋長となり、誰よりも大金持ちとなったリゴウンは、ポトラッチを催すことにした。あんな集まりはなかった。川の岸には五百艘ものカヌーが並び、一艘のカヌーには十人以上の男と女が乗っていた。八部族の集合だ。最年長の老人から最年少の幼子（おさなご）までが集結した。ポトラッチの噂を聞きつけた遠くの部族の連中、大いなる旅人で偉大なる探求者である連中も集まった。そして、七日間にわたって、彼らは肉と酒でお腹をいっぱいにした。八千もの毛布をリゴウンはあたえた。それぞれの地位と階級にしたがって毛布を数え分配の役をしたのは、ほかでもない俺だった。だから、よく覚えておるよ。しかし終いに、リゴウンは一文無しになってしまった。それでも、彼の名前は皆の口にのぼることとなり、ほかの酋長たちは、リゴウンがそんなにも偉くなってしまったのが口惜しくて、みな悔しがっていた。

「こうしてリゴウンの言葉が重いものとなった。そして彼は平和を求めた。平和の役に立つところならどこへでも行った。あらゆるポトラッチ、宴会のすべて、どんな部族会議にも彼は出向いた。そしてリゴウンと俺がニブラックが開いた宴会に出かけることになった。ニブラックは、スティキーン川から遠くないスクート川沿いに住む川インディアンの酋長だ。これはリゴウンが齢をとり、もう死ぬのも間近となった最後の日々のことだ。冷気やキャンプの煙で酋長は咳き込み、咳きに血が混じっていた。もう死は遠くないと思った。

「そんなときにもリゴウンはこう言っていた。『いや、流血がナイフを染め、剣が交わる響きがあり火薬の臭いがする。そんなふうに男たちが冷たい鉄剣とすぐ飛び出す鉄砲玉のことなんかを喚き散らすときに、死ぬのがいちばん良いのじゃろう』とね。だからな、白き顔の人よ、明らかにリゴウンは、まだまだ戦をする気じゅうぶんだったんだ。

「チルキャット川からスクート川への道のりは長かった。何日もカヌーに乗っていたよ。ほかの連中は櫂を漕ぐのに忙しかったが、俺は酋長の足元に座り、彼の言う掟に耳を傾けていた。掟が何かを、白き人であるお前に説明する必要はあるまい。なぜならその手の技にお前たちは長けているからな。しかし、それは『血には血を、位には位を』という掟だった。リゴウンの説明はもっと深いところまでいっていた。こんな具合だ。

「『オロよ、知っておけ。お前より小さき者を殺しても何の名誉にもならん。お前より大きな者を仕留めるがよい。お前の名誉は相手の大きさに比して大きくなる。二人の相手がいるとして、もし小さき方を倒したならば、お前が得ることになるのは嘲笑だけだ。インディアン女でさえお前を笑うことになろう。言っているとおり、平和は大事である。しかし、オロよ、それでも相手を殺さなければならないなら、この掟に従って殺したまえ』

「これがスリンケット族のやり方なのさ」と、なかば言い訳するかのようにパリトラムは言った。

ここで私は、西洋のガンマンと悪党どものことを思い出した。だから、スリンケット族のやり方に当惑したりはしな

かった。

パリトラムが続ける。「やがて、我々は、スクート族のところ、ニブラック酋長のところに到着した。それはリゴウンが開いたポトラッチとほとんど同じくらい盛大な宴会だった。チルキャット族、シトカ族、スクート族の隣人スティキーン族、ランゲル族、フーナー族の連中がいた。サンダウン族、ホートン要塞あたりのターコー族、彼らの隣人でダグラス海峡あたりに住むオーク族、ナース川の部族、ディクソンの北に住むトンガ族、クプリーノフ島出身のケイク族もいた。ヴァンクーヴァー出身のサイウォッシュ族、ゴールド山脈出身のキャッシアー族、テスリン族、ユーコン地方のスティック族もだ。

「それは大きな集まりだった。ともあれ、まず各部族の酋長たちとニブラックの対面式があった。クヴァスを飲んで恨み辛みを忘れる儀式だな。親父が言うには、クヴァスの作り方を教えたのはロシア人だったそうだ。親父もじいちゃんから聞いただけらしいが。が、とにかく、ニブラックはこのクヴァスに色んな混ぜ物を入れていた。砂糖、小麦粉、ドライ・アップル、そしてホップ。だから、それは男のための強くて旨い酒だった。〈スリー・スター〉ほど旨くはないがね、白き顔の人よ。でも、あれは旨かったな。

このクヴァス・パーティは酋長たちだけの宴会だった。酋長は全部で二十人はいた。だが、リゴウンが最長老でもっとも偉大とされた人物だった。それで、わが酋長が俺の肩に手を掛けられるようにと俺も出席することを許されたんだ。座ったり立ったりするのを手伝えるように。丸太でできたニブラックの大きな家に入るとき、その戸口で酋長たちは槍、ライフル銃、ナイフを置いていくことになっていた。白き顔の人のお前にも分かるとおり、酒を飲めば血のめぐりがよくなり、昔からの敵意がよみがえったりする。手も頭も動きがはやくなる。でも、リゴウンはナイフを二本持ってきていて、戸口のところに二本のうち一本を置いていきはしたが、もう一本はちゃっかり毛布の下に隠していた。これが俺

には分かっていた。ほかの酋長も同じさ。どうなることやら、と思ったね。

「酋長たちは、小屋の中で大きな円の形になって座っていた。俺はリゴウンのすぐ隣りだった。真ん中にクヴァスの樽があり、酒をつぐ役の奴隷が一人その横に座っていた。まず、ニブラックが、親愛の情を示すべく大げさな言葉をつかって挨拶の言葉を述べた。そして合図すると、奴隷がクヴァスでいっぱいになったひょうたんをリゴウンに渡した。リゴウンが最高位の人物だったから、それが適切なやり方だったんだ。

「わが酋長がそれを飲み干すと、俺の助けを借りながら立ち上がった。そして挨拶だ。多くの部族に優しい言葉をかけ、こんな宴会を開いてくれたニブラックは偉い奴だと言い、いつものように部族間に和平を求め、最後にこのクヴァスは最高だと言った。

「すると、リゴウンの次の地位にいたニブラックが酒を口にした。このあとは、位にしたがって順々と酋長たちが次から次へと酒を飲んでいった。皆も、他の部族に感謝を述べ、このクヴァスは最高だと言った。全員が、と俺は言ったかな？　いや、全員ではなかったんだよ、白き顔の人よ。最後の男、痩せて猫のような目つきの男、若い顔立ちで鋭く大胆そうな目つきの男は、こっそり酒を飲み、床に唾を吐き何も言わなかったんだ。

「このクヴァスは最高だと言わないのは、侮辱のしぐさだったんだ。床に唾を吐くのは、もっとひどい侮辱だ。これを奴はやってのけたんだな。彼は、ユーコン地域のスティック族の酋長ということらしかった。それ以上のことは誰も知らなかった。

「言ったとおり、それは侮辱のしぐさだ。しかし、知っておいてくれ、白き顔の人よ、これは宴会の主催者であるニブラックに対する侮辱というより、その場に居合わせた者のなかで最高位の者への侮辱だったんだ。つまり、リゴウンへの侮辱というわけさ。無音だった。誰もがリゴウンがどう反応するのかを注視した。リゴウンは動かない。彼の皺だ

らけの唇が震えて言葉が出てくるということもない。鼻の穴さえ動かず、瞼が揺れることもない。リゴウンが青白く、老人がそうであるように灰色っぽく見えた。飢饉が襲ったあとの冷たい朝に老人がする表情だ。あるいは、食い物がなくて、それが手に入る予定もなくて、女が嘆き子どもが泣く、そんな朝の老人の顔つき。リゴウンがそんな老人のように見えた。

「酋長たちは沈黙したままだった。車座に座る死者たちだった。でも酋長たちの誰もが確認のため毛布の下に手を伸ばしていた。また、右あるいは左に座る酋長の思いを測ろうとするかのように、目を光らせていた。俺は若造で大した経験もなかった。それでも、これが生涯で一度経験するかしないかの重大な場面なんだと分かっていた。

「そのスティック族の男が立ち上がった。皆が注目する。そして、リゴウンの目の前まで歩み寄る。

「『俺はナイフ男のオピツャー』と彼が言う。

「が、酋長は何も答えない。オピツャーを見もしない。ただ瞬きもせずに床を見つめている。

「『お前はリゴウンだろう』とオピツャーが言う。『何人もの男たちを殺してきたはずだ。が、俺はまだ生きている』

「それでも酋長は無言だ。と、俺に合図してきた。手を貸してやると、酋長は真っ直ぐに立ち上がった。まるで古い松の木みたいだった。むき出しの灰色。が、冷気にも嵐にも立ち向かえる。まだ瞬きもしない。オピツャーの言葉など届いていないようで、だから、オピツャーの姿も目に入っていないかの様子。

「オピツャーは、狂ったみたいに腹を立てた。それで、さらなる侮辱を加えるため、リゴウンの目の前で膝をつっぱらせてダンスをした。自分の、そして自分の部族の偉大さを誇る歌も歌いはじめた。チルキャット族とリゴウンを馬鹿にする歌詞の歌だ。ダンスをし歌いながらオピツャーは毛布を振り払ってナイフを取り出し、それで酋長の目の前で円を描くようなしぐさをする。彼が歌っていたのは、「ナイフの歌」だ。

「ほかに音はなく、オピツァーの歌声だけが響いていた。車座の酋長たちは死者のようだった。オピツァーのナイフのために、彼らの目にくすぶった炎がいくらか燃えてはいたが。リゴウンも微動だにしない。自分の死は意識していたかもしれないが、恐れてはいない。オピツァーのナイフが顔にだんだん近づいてくる。でも、瞬き一つしない。体が揺れるということもない。

「オピツァーがナイフを振る。二度ほどリゴウンの額を切る。赤い血が飛び散った。酋長が歩けるように俺の若い力で手伝えと合図したのは、そのときのことだ。そして、ナイフ男オピツァーの眼前で大笑いして、けちょんけちょんに彼のことを貶(けな)したんだ。とおるのに邪魔になる高い雑草を横にやるかのように、リゴウンはオピツァーを横にどけ進み出た。

「俺には分かっていたんだ。二十人の酋長たちの前でリゴウンがオピツァーを倒したとしても、そこには名誉などないということが。掟を俺は思い出していた。リゴウンが掟にかなったやり方で殺しをしようとしているのが分かっていた。相手にすべきは、リゴウン酋長の次の位の者だ。ニブラックしかいないじゃないか。だから、酋長は俺の肩につかまり、ニブラックのほうへ進んでいった。俺の反対側にオピツァーは立っていて、まだしつこくナイフを振り回していた。奴は小者すぎて、偉大なる我らが酋長を手にかけることができなかったんだがね。確かにオピツァーのナイフが何度か酋長に届くこともあった。が、リゴウンはまったく動じなかったし気にもしていないようだった。それで、こんな格好のまま、我々三人は毛布に包まっていたニブラックのほうに向かい、部屋の中を進んでいった。ニブラックは怖がっていたな。

「ここにきて、皆の忘れられたはずの恨み辛みに火がついてしまった。ケイク族のラマクは、スティキーン川の急流で弟を失っていた。そのときスティキーン族は、しきたりどおりに慰謝料の毛布をラマクに渡してはいなかった。だか

ら、ラマクは長いナイフで、スティキーン族の酋長クロク・クッツを刺し殺した。カチャフークは、ナース族とディクソンの北に住むトンガ族との間の諍いを思い出した。だから、カチャフークは拳銃でトンガ族の酋長を撃ち殺した。こうして、車座に座っていた酋長たちが皆、流血への欲望に目覚めてしまったんだ。酋長たちが互いに殺し合ったのさ。彼らはリゴウンにもナイフや銃を向けたよ。だってリゴウンを討ち取れば大いなる名誉ということになり、その名が永遠に刻まれるということになるからな。酋長たちは、まるでムースを囲む狼みたいだった。違っていたのは、そこに人間が多すぎて、自分の場所を確保するため、彼らはまず互いに殺し合わなければならなかったことだ。大混乱になったというわけさ。

「しかし、急ぐという様子でもなく、リゴウンはゆっくりと進んでいった。まるでまだまだ寿命があるとでも言うかのように。酋長は、誰かにやられる前に、自分は自分のやり方で獲物を仕留められると確信しているみたいだった。言ったとおり、ゆっくりとした歩みだった。ときどきナイフの刃が彼に届く。リゴウンは真っ赤だ。俺は若造だったから、誰も俺を追ってはこなかった。それでも、ナイフの刃に触れることも銃の玉に身を焦がされることもあった。が、酋長は俺に身をゆだねていた。オピツァーはまだナイフを振り回していた。そんなふうに三人で進んでいった。ニブラックのところに着いたら、奴は怖がって頭に毛布を被っていたよ。スクート族の連中は、昔から臆病なんだ。

「魚を食う者グールザグと肉を討つ者カディシャンが、部族の名誉を賭けての一騎打ちに臨んでいた。二人はそこらじゅうを狂ったように動き回っていた。オピツァーは彼らに膝を蹴り飛ばされ、ひっくり返って踏みつけにされた。ひっくり返った拍子に彼の手を離れたナイフが音と立てて飛び、シトカ族のスカルピンの喉に突き刺さった。腕を広げて倒れるスカルピンの巻添えをくって、俺も倒れてしまった。

「だから、ニブラックを上から眺めおろす酋長を俺は地面近くから見ていたんだ。酋長は、ニブラックの頭から毛布

を剥ぎ、顔を光のあるほうに向けさせた。酋長は急いではいなかった。目が血まみれになっていたから手の甲で血を拭い、視覚を取りもどして確認した。上に向けさせた顔がニブラックのそれだと確信すると、震える鹿の喉元にそうするように、リゴウンはニブラックの喉をナイフで切った。それから酋長は真っ直ぐに立ち、死者への歌を歌うと、前後にゆっくり揺れた。そのとき、俺を倒したスカルピンが、倒れたまま拳銃を撃った。すると酋長は、強風のなか倒れる松の老木のように倒れた。

パリトラムは話を止めた。くぐもった光をたたえた彼の瞳は焚き火を見つめていた。頬が血潮で赤黒く染まっている。

「それで、お前、パリトラムはどうしたんだ?」と私は訊いた。「お前はどうなったんだ?」

「俺か?　掟を思い出して、ナイフ男のオピツァーを殺したよ。それがすべきことだったからな。そしてニブラックの喉からリゴウンのナイフを引き抜き、俺を転ばしたスカルピンを斬った。俺は若造だったから、誰を倒しても名誉になったんだ。それに酋長が死んでしまったので、支えとして俺の若き力を必要とする者ももうなかった。それで俺は酋長のナイフを手に暴れまわったのさ。まだ生きてる酋長で最高位の奴を狙ってね」

パリトラムはシャツの下をまさぐって、ビーズ付きの鞘を取り出す。鞘からはナイフが出てきた。それは自家製のナイフで、糸ノコ鑢(やすり)で作ったものだった。アラスカの村々で多くの老人たちが持っていそうな、無骨なナイフである。

「リゴウンのナイフなんだな」と私が言う。パリトラムは頷く。

「リゴウンのナイフと交換なら、〈スリー・スター〉を十本やってもいいぞ」と、私。

だが、私を見ようとするパリトラムの動きはゆっくりとしたものだった。「白き顔の人よ、俺は水のように弱く、女のように頼りない。腹はクヴァス、密造酒、〈スリー・スター〉で汚れちまってる。目はかすみ、昔の聴力もなく、筋肉は贅肉になっている。もう昨今では名誉も何もない身さ。飲み助のパリトラムなどと呼ばれている。それでも、スクー

ト川のそばで催されたあのニブラックのポトラッチでは、名誉は俺のものだった。そしてあの宴の思い出、リゴウンの思い出は、俺にとってかけがえのないものだ。だから、たとえお前が大海をぜんぶ〈スリー・スター〉に変え、ナイフと引き換えにそれを俺にくれると言っても、このナイフだけは手放せん。今や俺は飲み助のパリトラムだ。が、かつては、いつでも空腹なる者オロであった。若き力でリゴウンを支えたオロだった」

「お前は強き者だよ、パリトラム。敬意を払いたい」と、私は言った。

パリトラムが手を伸ばしてきた。

「話を聞かせてやったのだから、そのお前の膝のあいだにある〈スリー・スター〉は俺のものだな」

私たちの背後にあった不機嫌そうな崖のほうを見やると、巨大な影となったパリトラムの上半身が映っていた。上下逆さまになった酒瓶の下の彼の姿。その巨大な影が映っていた。

《訳注》

（1）ウナラスカ湾、ケイク族など。この作品では、あとにも多く土地・部族が固有名詞で言及される。人名以外はほとんどロンドンが創作した固有名詞はないと思われるが、地名などについては地図のかたちで、ネイティブ部族については当時の文献等を調査のうえ、まとめてみたいと思っている。

（2）白き顔のボストン・マン。原語は〝Hair-Face and Boston Man〟であり、そのまま訳せば「毛深い顔のボストン・マン」であり、もちろん、白人の米国人のことだ。ただし、北極圏のネイティブの視点からコーカソイドの白人の顔が毛深く見えたとは考えづらいく、〝Fair〟（白人）の訛りと解した。「白人のリ・ウォン」（〝Li Wan, the Fair〟）とのつながりも考慮した。

【訳者付記】

〝The Death of Ligoun〟。短編集『氷点下の子どもたち』に八番目に収録されている作品。三七〇〇語。雑誌掲載・初出誌なし。書籍版短編集出版のために、雑誌掲載をロンドンは断念した。しかし、『アウティング』誌のあと、『マックルア』、『サタデイ・イヴ

ニング・ポスト』、『コリアーズ』、最後は『アトランティック』誌にまで投稿している。作品に対する自分の評価眼やマーケット感覚への自信のなさ、その揺れなどを読むべきなのだろうか。

執筆は、一九〇二年二月二十二日から三月四日のあいだ。直後に「酋長ローン・チーフの病」が書かれている。執筆時系列における前作はSFものといっていい「影と光」。おそらく執筆状況として特筆に値するのは、本短編集の冒頭を飾ることになる「極北の森」脱稿のあと（一九〇一年十一月二日）――この短編で大まかな短編集構想が決まったとおぼしい――、約三カ月を経てこの作品と次作「ローン・チーフ」が続けて書かれていること、そして、この三カ月の逸脱期間に「火を熾す〔一〕」、「バタール：悪魔の犬」のようなのちの名作の明らかな萌芽が感じられる作品が書かれていることであろう。前者が「火を熾す〔二〕」に、後者が『野性の呼び声』に繋がっているのは明らかだ。また、まったく雰囲気も内容も違う前作「影と光」と光学的関心は連続している。

あくまで後日の評価を基準にした想像になるし、おそらく作家本人はただ手探りしていただけだったのだろうが、ロンドンがさまざまな実験を試みていた、とは言えるだろう。

部族間の闘争を止めさせ平和を求めた偉大な酋長リゴウンの最期の状況を、今や呑んだくれとなっている語り部「台本なき台本書き」（"scriptless scribe"）パリトラムが白人の聞き手に対して語る。そんなフレーム・ナラティブである。ロンドン作品では常套といえるが、冒頭の雰囲気・舞台設定のオープニングが秀逸であり、その「影」のモチーフが作品を閉じるのにも再度利用されている。焚き火が映す影としての主人公兼語り部の姿である。白人読者を前にした作家の影なのであろうか。パリトラムは大きな天空の世界をも視野におさめ、読者はオーロラの舞うクロンダイクの世界をまず意識しながら物語世界に入ってゆくことになる。

語り手パリトラム（Palitlum）の名は、書いたものを消し再度ものが書ける羊皮紙、あるいは文学作品の焼き直し、改作を意味する「パリンプセスト」（palimpsest）を容易に想起させる。平和を求める老いた酋長が暴力の不可避性を前にして、若きナイフ男のオピツァーやスカルピンによって倒される。何度も繰り返される人類の、アメリカ的生き方の宿命を語っているのだろうか。あるいは滅びゆくアルコール中毒のネイティブたちの運命を語るということなのだろうか（次作「ローン・チーフ」とのリンクであるのは間違いない）。

パリトラムは若き日に「いつも空腹なる者オロ」であった。この名前の書きかえを再演するかのようにナラティブは、「いや違う。当時、俺はオロであった」と強調する。さらに、このオロという名は語り部が晩年、明らかにプライドを覚えている名前であるが、すでに執筆済みであった「白人のリ・ウォン」で犬の名として使われていた。分割すること＝境界線を引くことが境界線の侵犯を引き起こすとする、この先行作品の主題を考えれば、その焼き直しと考えられるだろう。もう一歩踏み込めるだろう。「リ・ウォン」

では人種の、階級のあいだの境界線であった。そこで犬であったオロが、ここでは語り部の若きころの名前となっている。作品をまたいで人と犬の境界線が侵犯されていることになる。ロンドンの世界にあってはお馴染みの風景である。作家は言葉少なに、しかし確実に、自らの名を署名している。どうやら、創作家・台本書きの原点にきわめて近いところに我々はいるようだ。

（おおや・たけし　理工学部准教授）